

イチゴ「ふくはる香」の促成栽培における育苗期及び 本圃の窒素施肥量

福島県農業試験場 野菜部
平成16年度試験成績概要
分類コード 03-07-01131800

部門名 野菜－イチゴ－品種、施肥法、作型・栽培型
担当者 雨宮潤子・太田弘志・山内富士男

I 新技術の解説

1 要旨

「ふくはる香」の育苗期の窒素施肥量を50mg/株にすることで安定した花芽分化が得られ、なおかつ、うどんこ病の発生が抑制される。

また促成栽培の本圃窒素施肥量は1.3kg/aまで削減しても生育、収量に問題がない。

- (1) 「ふくはる香」の花芽分化ステージは、育苗期の窒素施肥量を50mg/株とすることにより9月中旬には、花芽分化初期以降に確実に進む。
- (2) 定植時の苗の生育は、育苗期の窒素施肥量0mg/株では劣るが、50mg/株と100mg/株では、大きな差はない。
- (3) 育苗期の窒素施肥量を50mg/株程度に抑えると、うどんこ病発生を低減できる。
- (4) 促成栽培での各花房の開花日・収穫日は、本圃窒素施肥量が1.7kg/a及び1.3kg/aでやや前進化する。
- (5) 促成栽培の本圃窒素施肥量は、1.3kg/aまで低下させても生育、収量に影響はない。

2 期待される効果

県内で行われている促成栽培に対しオリジナル品種「ふくはる香」の導入が円滑に行われるとともに、施肥量の削減から環境負荷軽減や低コスト栽培の効果が期待できる。

3 適用範囲

県内全域

4 普及上の留意点

- (1) ふくはる香の促成栽培にあたっては、最低夜温6～8℃を確保する。
- (2) ふくはる香はうどんこ病に弱いため、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。
- (3) 育苗期については、固形肥料を用いた結果である。

II 具体的データ等

表1 育苗期窒素施肥量別の花芽分化推移

窒素施肥量 kg/株	花芽分化推移				
	2004年		2005年		
	9/9	9/15	9/9	9/14	9/18
0	-	-	1.3	1.8	2.8
50	-	-	1.3	2.6	3.0
100	1.0	3.5	0.3	1.4	1.4
200	0.4	1.0	0.3	0.6	0.4

※花芽分化指数

0: 未分化

1: 花芽分化初期

2: 花芽分化期

3: 花芽分化期

4: ガク芽形成初期

5: ガク芽形成期

表2 定植時窒素施肥量別の苗生育状況

窒素施肥量 kg/株	2004年			2005年		
	葉柄長 (cm)	小葉長 (cm)	クラウン径 (mm)	葉柄長 (cm)	小葉長 (cm)	クラウン径 (mm)
0	-	-	-	9.8	6.7	6.6
50	-	-	-	14.4	9.2	7.6
100	11.1	9.3	8.8	12.5	9.3	7.5
200	13.2	10.5	9.5	14.5	11.0	8.9

※収量測定地

2004年: 田81号圃地

2005年: 田47号・424号圃地

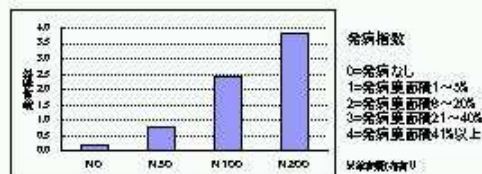


図1 育苗期窒素施肥量別のうどんこ病発生状況(2005年9月15日調査)

表3 本圃窒素施肥量別の各花房開花日・収穫日(2004～2005年)

窒素施肥量 kg/a	1花房		2花房		3花房		4花房		5花房	
	開花日	収穫日	開花日	収穫日	開花日	収穫日	開花日	収穫日	開花日	収穫日
2.5	11/19	1/4	12/20	2/21	2/18	3/28	3/14	4/18	4/16	—
2.1	11/19	1/4	12/20	2/21	2/18	3/31	3/14	4/14	4/11	—
1.7	11/18	12/30	12/20	2/17	2/9	3/28	3/9	4/14	4/16	—
1.3	11/17	1/4	12/24	2/21	2/9	3/28	3/9	4/14	4/11	—

※開花日及び収穫日は、調査株の50%に達した日

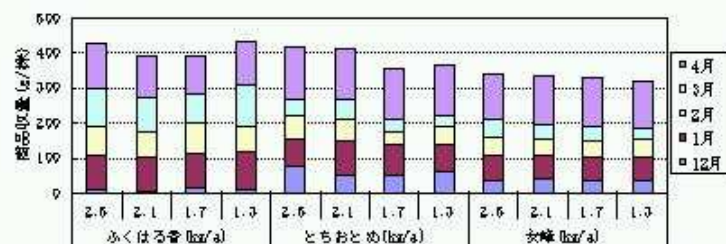


図2 本圃窒素施肥量別の商品果収量(2004～2005年)

Ⅲ その他

1 執筆者

太田弘志

2 主な参考文献・資料

なし